

逢魔が時の黙示録

駄作者 文福洞光斗

おちよぼ様

夕日が落ちて暮れなずむ逢魔が時は女性がみな美女に見えるのでございます。うれしいやら恐ろしいやらが緋い交ぜになる一瞬ですね。私にも思い出がございます。遠い美少年の頃、岐阜県の笠松観音でお祭りがあるということで、親戚の子どもたちと連れだって出かけた折のことです。

日も暮れ、祭囃子も佳境に入り始めたころでした。笠松観音の境内の人ごみの中で、妙齡の美しい女性が私に手招きしていたのです。子供心にもあまりの妖艶さに、ふと誘われるままに彼女の傍らに寄り添ったと思います。しかし、その後のことはいまとなっては何も思い出せません。こうして思い出を書いているからには、神隠しにあってどこかに連れていかれたままになったのでもなさそうです。少なくとも、羽島市八神にある祖父の本家に帰りついたのでしょう。

名古屋から名鉄に乗って、岐阜か笠松で大須行の単線に乗り換え、終着駅に近い八神に着きます。大須には近隣の信仰を集める、有名なおちよぼ稲荷がございます。おちよぼ様にあぶらげ(油揚げ)をお供え、霊験あらたかなお水を1升瓶にいただきます。これを杯で飲むと健康が授けられるのです。祖母は病弱であった私に時々、おちよぼ様のご霊水を飲ませてくれました。この祖母は父の先妻の長子である私を厳しくはありましたが、とてもかわいがってくれていました。私の母はごく若くして、妹のお産の時に他界したので、2歳で母を失った私を憐れんでくれていたのでしょう。

木曾川のほとりにある八神は私の心の中の大切な故郷です。しかし、八神に毎夏通ったのは、大学試験に落ちた一浪生の時まででした。心の中の神聖な故郷(真の自然)は思い出としておけばよかったのですが、父が他界した後、葬儀に参列していただいたお礼に本家を訪ねました。新幹線岐阜羽島に行き、笠松の旅館で1泊して単線に乗り換えて、八神に行ったのです。30年ぶりで訪れた木曾川は堰によって流れを失い、子どもころの面影をすでに失っていました。ボンボン蒸気(渡し船)に乗らずに、命がけで櫓をこいで愛知県側に渡った冒険の川ではなかったのです。長ずるに及んで、見るべきではないものを見てしまって、心の原風景がボロボロと崩れました。笠松の旅館の女将さんは同世代でしたが、現地にいながらに「わじわじこの喪失感を味わったそうでございます。

翌日、傷心の私は訪れたことがないおちよぼ様を拝観することにしました。大須からタクシーに乗って行きましたが、なんと広い境内、参道には参詣者が多く驚嘆しました。たくさんお供えされたあぶらげのおすそわけを求めて、カラスが叫び鳴いていました。おちよぼ様の振るわいを感

じながら、木曾川の美しい自然を壊してさへも、人間が幸せを願う霊水への信仰心は続くのだと、想念が混乱してきました。この時、はっと気付いたのでございます、笠松観音で私を誘なっ
てくださったのは、おちよぼ様のお使いの狐女ではなかったのかと。

2009-1-17 改定

続く